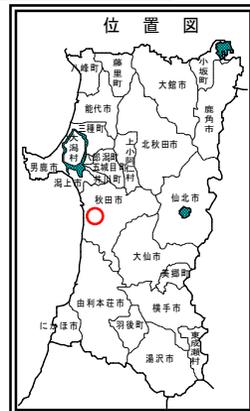


仁井田堰土地改良区

受益面積 695ha

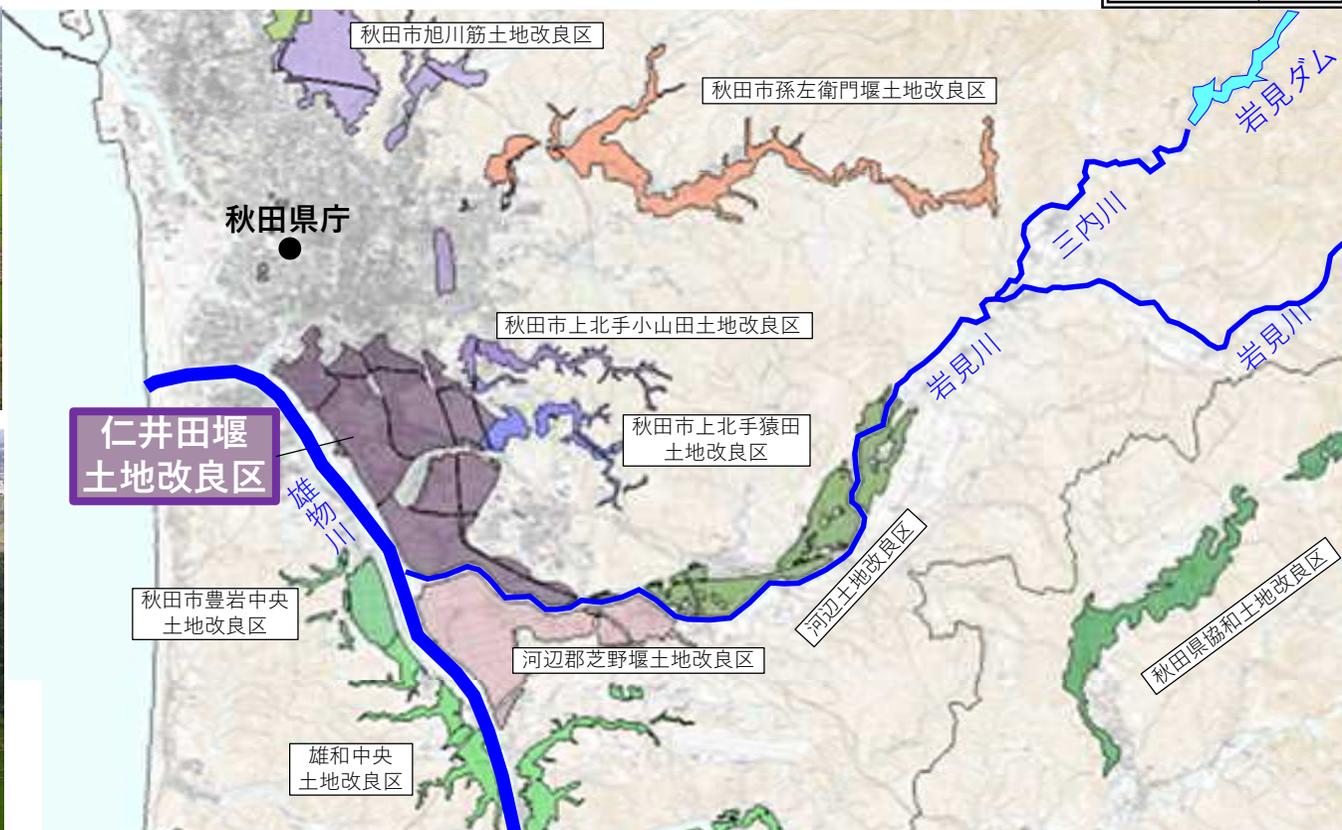


地域の概要

■ 仁井田堰土地改良区の受益地は秋田市の市街地エリア南部に隣接する都市近郊農地であり、雄物川支流の岩見川から農業用水を取水している。

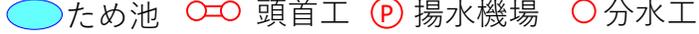
地域の歴史

- 仁井田堰は、古く元和二年（1616年）を起源とする。この年、佐竹藩の家老 梅津氏が、仁井田原野の開墾に着手するとともに水路工事を始めたことによる。
- 全長18kmの仁井田堰の開削と新田開発は難工事で、完成まで梅津家四代、80年の歳月と莫大な資金を費やし、元禄8年（1695年）に完成した。
※ 仁井田堰土地改良区 看板より



【内 容】

- 農業水利システム
- 特徴的な施設
- 施設の維持保全
- ほ場整備事業等
- 地域の歴史①
- 地域の歴史②

作 成	秋田県 農業農村整備等技術検討委員会 秋田県秋田地域振興局農村整備課
協 力	・ 仁井田堰土地改良区 ・ 秋田市 ・ 秋田県土地改良事業団体連合会
作成経緯	ver. 1.0 令和7年3月
基本凡例	  ※ 資料作成の都合上、必ずしもこれらのおりの表記となっていない場合がある
出 典	<ul style="list-style-type: none"> ・ 秋田県水土里情報システムのレイヤを使用したものは次のとおり 地形図：「測量法に基づく国土地理院長承認（使用） R6JHs 74-GISMAP59536号」 航空写真：「© NTT InfraNet, JAXA」 衛星写真：「© NTT InfraNet, Maxar Technologies.」 ・ その他土地改良区提供資料など
備 考	<p>本資料は、秋田県の農業を支える基盤であり、地域資源でもある農業水利施設について、土地改良区毎にその構成、歴史、維持管理等の概略を示し、土地改良区の組合員のみならず地域住民の皆様に対し広く周知するものです。</p> <p>これにより、各地域の農業水利施設を保全管理することの重要性について理解を深めていただき、農業水利施設の持続的な機能発揮と秋田県の農業の発展の一助となることを目指しています。</p> <p>本資料については、現地調査に加え、水土里情報システム内の資料、過去に実施した事業の資料、土地改良区からの提供資料、土地改良区からの聞き取りなどをベースに作成していることから、時点が古い情報や現状と比較し正確ではない情報が含まれていることがあります。このため、本資料を閲覧される方に置かれましては、このことを予め御了知いただくとともに、本資料を利用すること等により生じるトラブルや損害等については、秋田県ではその責任を負いかねますので、予め了承ください。</p>

- 雄物川支流 岩見川下流部の仁井田頭首工から取水。頭首工の取水ゲートはスマートフォンでの遠方監視・遠隔操作が可能。
- 受益地への幹線水路は開水路。
 - ・ 第一1工区（仁井田東部）・第三1工区（十八石堰）に向かう支線入口は、降雨時の排水迅速化・省力化のためウォッチマンゲートを装備。
 - ・ 第一2工区（仁井田西部）は幹線水路より標高が高いため、仁井田下堰揚水機場よりポンプアップし支線水路（開水路）に注水。
 - ・ 用水不足時に対応するため、幹線水路に3か所、排水路（排水河川）上に2箇所の補助ポンプを設置。

仁井田下堰揚水機



福島苗代堰分水工
仲谷地揚水機場



御野場堰水門



やぶれ沼



十八石堰水門



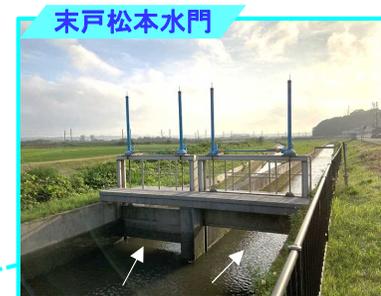
和田堰水門
刈切堰水門
ウォッチマンゲート



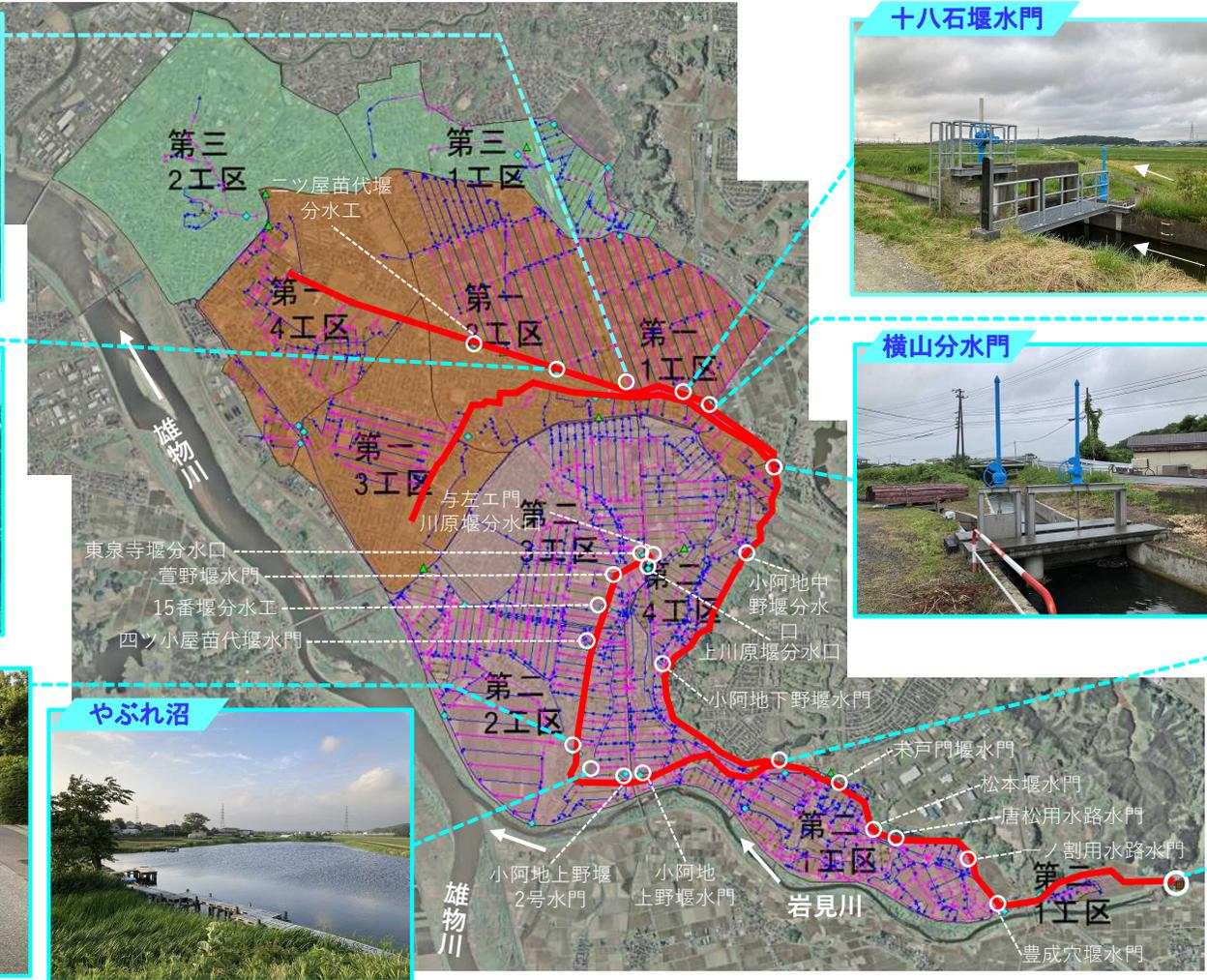
横山分水門



末戸松本水門



仁井田頭首工



特徴的な施設

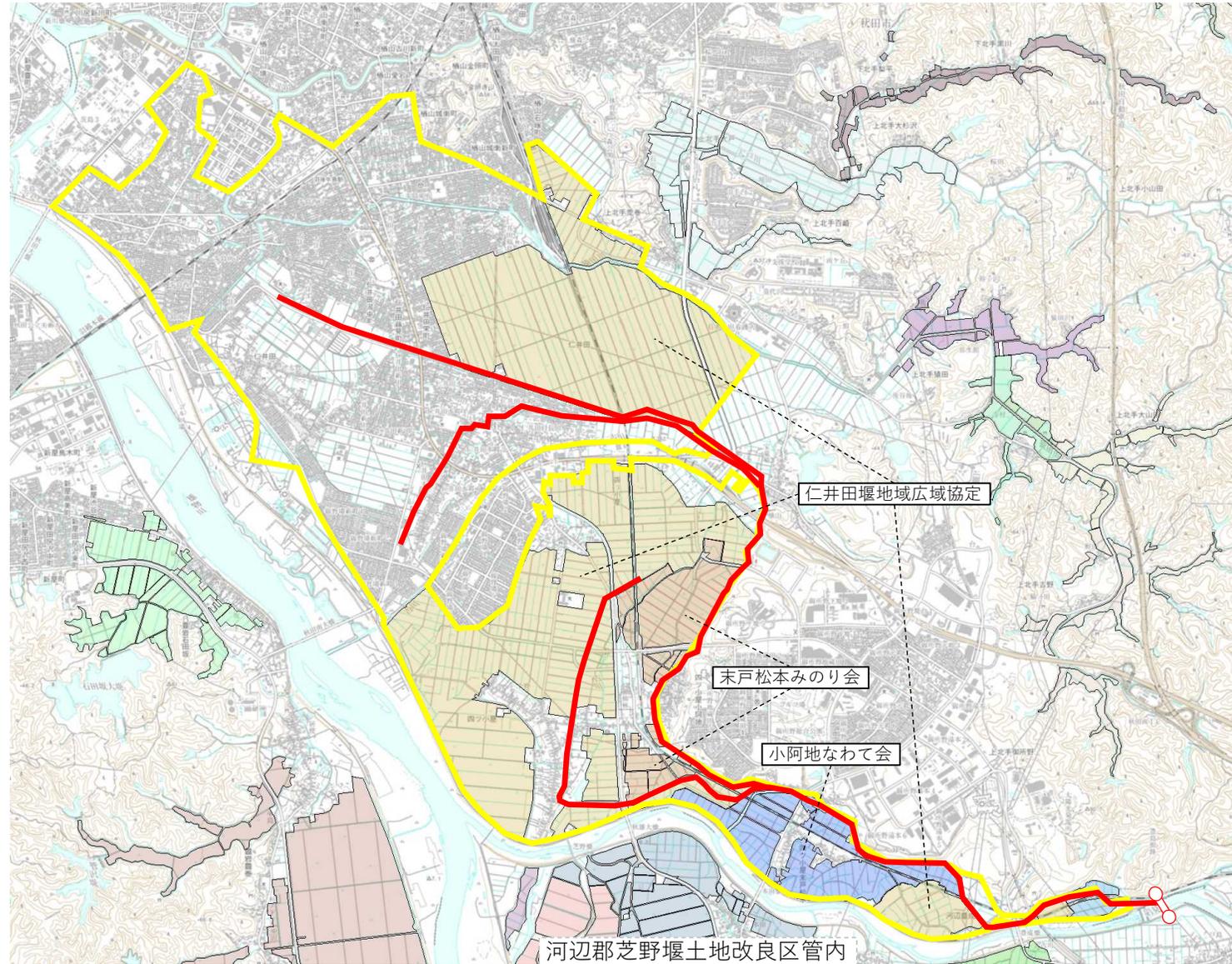
上流水位一定型自動ゲートによる降雨時の迅速な流水の流下

- 水路の流量が限られる中、標高の高い支線水路に分水するためには幹線水路に調整ゲートを設置し堰上げが必要。
- 他方、豪雨・洪水時には、水路からの溢水が生じないように、堰上げゲートを速やかに開放し流水を流下させる必要。
- 上流水位一定型ゲートは、通常時の堰上げと降雨時等の開放を自動で行う省力型施設。

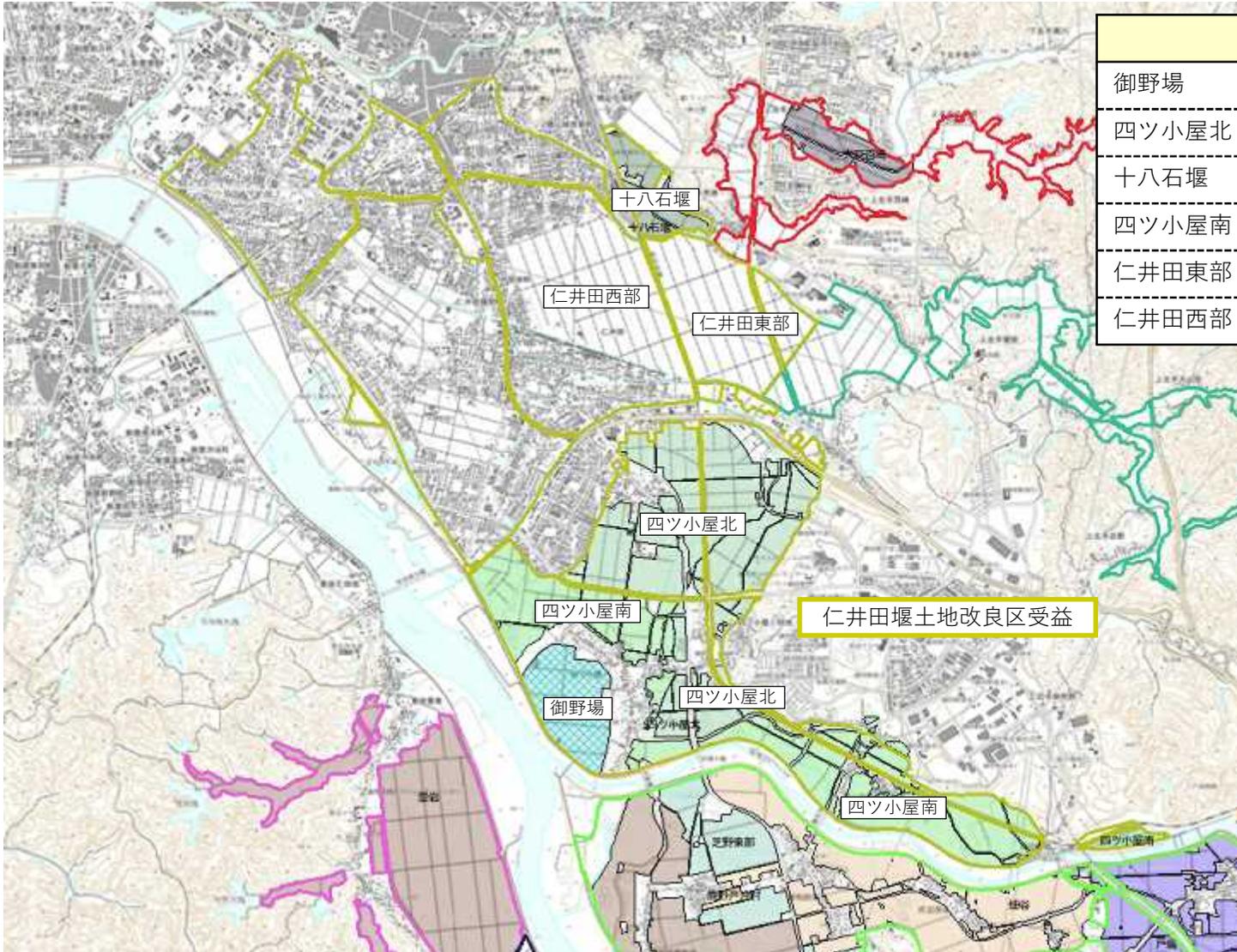


- ゲート上流側の水位を一定に保持。
 - ・ 水位超過すればゲートが自動で開く
 - ・ 設定水位の変更が可能
- 堰上げだけであれば現場操作型のゲートと同様だが、特に降雨など増水時に自動で開き、洪水を迅速に流下させるメリット
 - 洪水時に現場操作の必要が無し

■ 管内に 3 組織が存在。土地改良区は、このうち 1 組織の事務を受託。



- 平成10年度に完了した土地総「御野場地区」以降、しばらくほ場整備が実施されてこなかった。
- 都市近郊の条件を活かしつつ生産性の高い営農を行うため、平成30年度以降にはほ場整備を加速的に実施中。



	制度	工期	受益
御野場	土地総	H8～H10	48 ha
四ツ小屋北	加速化	H30～	159 ha
十八石堰	機構関連	H30～	18 ha
四ツ小屋南	加速化	R3～	162 ha
仁井田東部	機構関連	R5～	85 ha
仁井田西部	機構関連	R6～	92 ha

仁井田幹線水路



仁井田堰の起源は今から約400年前までさかのぼる。当時仁井田、四ツ小屋、牛島一帯は荒蕪たる原野で、わずかに大野、仁井田部落あたりに農家が点在しているに過ぎなかった。

佐竹家が久保田に移ってから、わずか14年後の元和2年(1616)、佐竹家の家老梅津憲忠は藩命を受け、仁井田原野の新田開発に着手。これは藩を挙げての一大プロジェクトだった。しかし、仁井田堰の開削と新田開発は難工事が続き、完成まで梅津家四代、80年もの歳月を費やした。

仁井田全景(昭和43年)



広大な田園の向こうに雄物川が流れている。かつて岩見川が合流した地点から下流の雄物川は、蛇行が著しく暴れ川そのものだった。

仁井田は雄物川が数年ごとに氾濫し、その度に川の流れが変わる沼地、低湿地であったと記されている。当時、洪水の被害は、仁井田だけでなく久保田城下にも及んでいたという。

仁井田神明社



元和2年(1616)、仁井田堰開墾の祖・梅津憲忠が新田開発の成功を祈って、山形県湯殿山から館岡兵部を別当として招き、村の祈願所としたのがはじまり。以来、仁井田地域の鎮守の森として崇敬されている。



仁井田神明社正面の彫刻は、原野を開墾する様子が描かれている。「仁井田」という地名は、もともと開墾されてできた村で、「新田(ニエタ)」と書いていたが、その後「仁井田」に書き改められたと記されている。

梅津家四代による治水・水路開削の歴史

元和2年(1616)、初代の梅津憲忠は利水事業と新田開発に着手した。しかし、治水工事を伴わなかったため、度重なる雄物川の氾濫に悩まされ、当時の土木技術の限界の中、憲忠は事業半ばにして寛永7年(1630)に没した。

藩主は氾濫源である雄物川の改修の必要性に気付き、豊岩村小山から大野村まで蛇行する雄物川を直線化する治水工事を三代目の梅津利忠に命じた。

利忠は、二代目忠国の遺金3千両と家金千両を注ぎ込み、この治水工事をわずか3年足らずで完成させ、次いで岩見川に水源を求め、山麓伝いに仁井田に通ずる15kmの水路開削に従事した。

水路開削は四代目忠宴に引き継がれ、父祖四代にわたる仁井田堰の開削は、寛文2年(1662年)に完成。さらに仁井田の新田開発を含めて藩の一大プロジェクトが完工したのは、元禄8年(1695)のことだった。

梅津家四代の碑



高橋武左衛門翁の肖像



四ツ小屋神明社



四ツ小屋開墾の守護神として寛永2年(1625)に社殿を建立

四ツ小屋という地名は、寛文12年開墾の目的で雄物川の川岸にあった4戸の農家が移住したことからその名が付いた。四ツ小屋の「御野場」は、一面アシが生え、ウツラが住む荒地だった。藩主が時々鷹狩りにきたことから「御野場」という名がついた。一面アシの荒地を美田に変えた偉人が高橋武左衛門翁である。

高橋武左衛門は、寛保元年(1741)、平鹿郡下境に生まれる。抜群の才能と実践力が認められ21歳の若さで肝煎役(村長)となったほど優れた青年であった。天明3年(1783)、佐竹藩から「検田」を命じられ、四ツ小屋を視察。枯草ばかりの御野場の原野を眺めて・・・何とか開墾できないものかと考えた。享和元年(1801)、藩命を受けて荒地開拓の工事を起こした。

四ツ小屋神明社境内「遺愛之碑」



末戸松本水門



四ツ小屋幹線用水路 (武左衛門堰) 仁井田幹線用水路

開墾で最も苦心したのは、水利の問題だった。最初は、豊島村小高の梵字川に水源を求めて水路を開いたが、夏には水量不足に陥り、失敗に終わった。新たに豊成から仁井田堰の水を引き入れて成功した。これが今なお武左衛門堰と呼ばれる四ツ小屋幹線用水路である。

こうして60余haの美田を開いたが、翁は自分の財産を全部失ってしまった。藩主の義和は四ツ小屋村に来てその功を賞し、社堂を建て「先農ノ神」と書いてこれを祀って礼拝したというほど感激したと言われる。ここからの収穫を藩主の「納戸米(なんどまい)」として蓄えたため、八棟の倉に米が溢れたと言われている。

佐竹義和公直筆



武左衛門を「先農ノ神」として祀り礼拝した。